

上野山古墳群分布調査報告書

— 宮城県柴田郡に所在する東北最大規模の高塚古墳群 —

平成7年7月

柴田町・村田町・大河原町共同推進事業協議会

序 文

蔵王連峰を仰ぎ見ることのできる柴田町・村田町・大河原町は、自然に恵まれた地域です。また、阿武隈川支流の白石川によって形成された沖積平野・盆地からなる地形は、人の営みを行う生活環境に適した場所とも言えます。

このことは、先人たちが残した遺跡（埋蔵文化財）の数の多さからも確認でき、人々の生活が長い間繰り返されてきたことが伺えます。

なかでも三町の中央に位置する上野山一帯には、多数の古墳があることが知られていましたが、正確な位置や数が把握されていなかったのが現状です。

今回、上野山董神山総合開発構想を策定するにあたり、先人たちの足跡である文化財を次の世代に残すことを考え、分布調査を実施することになりました。その結果、現存する古墳群としては東北最大規模の群集墳であることが確認されました。

この上野山古墳群の保存・活用をはかるためには、どうすればよいのか。「開発と文化財の保護」という課題を解決するためにも、この報告書が基礎資料となることでしょう。

今回の調査にあたり、調査指導していただいた佐々木安彦氏、芳賀寿幸氏、森眞喜氏をはじめ、柴田町・村田町・大河原町の関係職員の皆さんに厚く御礼申し上げます。

平成7年7月

柴田町・村田町・大河原町共同推進事業協議会

会 長 平 野 博

例 言

1. 本書は宮城県柴田郡柴田町と村田町に所在する、上野山古墳群の分布調査報告書である。
2. 分布調査は柴田町・村田町・大河原町共同推進事業協議会が主体となり、平成6年12月18日・平成7年2月5日・同月26日の計3回実施した。
3. 分布調査の参加者は下記のとおりである。
柴田町文化財保護委員：芳賀寿幸・太田 肇・安藤九平治
柴田町教育委員会文化財保護室：日下龍生・小玉 敏・高橋秀之
村田町文化財保護委員：佐々木安彦・佐藤信一
村田町歴史みらい館：高橋俊雅・高橋定光・石黒伸一郎
大河原町文化財保護委員：森 貫喜
大河原町教育委員会社会教育課：佐々木寿信・佐藤圭一
柴田町・村田町・大河原町共同推進事業協議会事務局：和田郁夫・佐藤好彦・野中一夫
4. 周辺の遺跡分布図は柴田町・村田町・大河原町共同推進事業協議会作成の5万分1図を使用した。
上野山古墳群全体の分布図は柴田町と村田町作成の1万分1図を使用した。
各支群分布図は柴田町と村田町作成の2千5百分1図を使用した。
5. 本文は芳賀寿幸が執筆、図版の作成と編集は佐々木安彦・芳賀寿幸・石黒伸一郎が行った。

目 次

1. 地理的位置と歴史的環境	1
(1) 地理的位置	1
(2) 歴史的環境	1
2. 調査研究小史	7
3. 古墳群の分布と立地の概要	9
4. 各支群の概要	13
(1) 寺後支群	13
(2) 日当山支群	13
(3) 立石支群	18
(4) 長窪山支群	18
(5) 鹿野山支群	21
5. 古墳の構造と副葬品	23
(1) 形 態	23
(2) 埋葬施設	24
(3) 副 葬 品	31
6. ま と め	33
引用・参考文献	35
写 真 図 版	37

1 地理的位置と歴史的環境

(1) 地理的位置

上野山古墳群は、宮城県南部地方のほぼ中央に位置する柴田郡柴田町及び村田町に所在し、両町にまたがる上野山丘陵（標高207m）地内に築造されている。

上野山丘陵は、奥羽山脈から派生して南方に突出した丘陵の、西寄りの南端部に当たる。JR東北本線船岡駅の北方に聳える山並みである。丘陵頂部からは、南方には東流する白石川が形成した沖積平野が、西方には村田盆地が眺望される。

なお、この上野山丘陵は、大河原町、村田町及び柴田町の3町域（川崎町を除く柴田郡域）を併せた区域の南半部のほぼ中央に位置している。（第1図）

(2) 歴史的環境

本古墳群の性格、築造された背景を探るため、周辺古墳・古代の官衙・生産遺跡について概観する。

まず、周辺古墳を見渡すと、白石川流域とその支流域に集中して分布していることが知られる。白石川は、蔵王山麓に源を発し、刈田郡七ヶ宿町、白石市、同郡蔵王町を流下した後、柴田郡に入り、大河原町・柴田町の南半分を東流する。その後、柴田町の東南端において阿武隈川に合流し、まもなく太平洋に注ぐ。

この白石川水系周辺に分布する古墳を巨視的にみると、中流域では白石盆地の東部地域と円田盆地の南部地域、下流域では村田盆地と大河原町・柴田町の白石川左岸丘陵地域を中心としている。なお、大型古墳や古墳の数という見地から、中流域と下流域の双方を比較すると、下流域の方が中流域よりはるかに多い。

次に白石川水系の下流域、すなわち柴田郡内（川崎町を除く）の古墳の分布の概況と主な古墳の特徴などについて記しておく。

最も古くから古墳文化が発達したのは、白石川の流域から北方に入り込んだ、本古墳群西方の村田盆地とみられている。ここは、交通の要衝であり、首長墓とみられる大型の前方後円墳などが、同盆地西側丘陵上を中心に築造されている。

千塚山古墳（前方後円墳〈主軸長85m〉）は、本古墳群から西方へ約2kmに位置する前方部が低平で細長く、先端部がバチ形を呈していることなどの特徴から、前期の古墳と推定され、県内最古の可能性も指摘されている。

船輪古墳（前方後円墳〈同35m〉）は、千塚山古墳の東方約300mに位置する。

愛宕山古墳（前方後円墳〈同90m〉）は、本古墳群から北西約3.5kmに位置する。白石川水系で最大の規模を有し、円筒埴輪、葺石が確認されている。前方部が低平な形態などから前期の古墳と推定されている。

薬師堂古墳（前方後円墳〈同35m〉）は、愛宕山古墳の西に位置する。

方領権現古墳（前方後円墳〈同64m〉）は、愛宕山古墳の北方約1kmに位置する。前方部と後部部の高さがほぼ同じで、前方部が発達した形態などから、中期以降の築造とみられている。

このほか下ノ内冨古墳、小塚古墳なども前方後円墳ではないかとみられている。

法領権現古墳と王塚塚古墳などは、方墳とみられる。王塚塚古墳は、本古墳群の鹿野山支群A群の北側に立地している。

蔵本古墳群・坂下古墳群・蛇口古墳などは円墳で、いずれも箱式石棺が埋葬施設となっている。

中山間横穴古墳群は、本古墳群から北北西へ約2kmに位置する。金銅装円頭太刀などを出土したことで有名である。このほかにも龍泉院、古館横穴古墳群などが盆地内の小丘陵斜面に立地している。

一方、白石川流域の大河原町・柴田町に目を転ずると、村田盆地にみられるような大型の前方後円墳などはみられないが、横穴古墳群が丘陵崖面を穿って造営されている。白石川右岸並びに同左岸の大河原町北西部丘陵は、浸食が進んだ低い丘陵であるため、少数の横穴古墳群が分散的に造営されている。他方、白石川左岸の柴田町北部丘陵は、浸食をあまり受けていない丘陵であるため、多数の横穴古墳群が集中的に造営されている。

薬師横穴古墳群をはじめとする横穴古墳群は、大河原町北西部の低丘陵地に立地しており、併せて12群、合計80数基が白石川にほぼ並行して連続と分布している。

上谷横穴古墳群などは、白石川右岸の低丘陵地に立地し、20数基を数える。

森合横穴古墳群は、本古墳群寺後支群の約500m東方に位置する。県南方最大規模とみられ100基を数える。末期的な形態を示すものが多く、8～9世紀の造営とみられている。

十八津入横穴古墳群は、同寺後支群の東方約1.5kmに位置し、48基を数える。

炭釜横穴古墳群は、白石川と阿武隈川の合流点北方の丘陵斜面に位置する。50～60基の横穴古墳群とみられ、中には横穴式石室を模して、羨道部に石積みを有するものもある。鈴釧・鍬・直刀・金環・勾玉・紡錘車など多彩な副葬品を出土したことで著名である。

石塚古墳は、数少ない高塚古墳の一つで、船岡館山の西麓にあり、白石川右岸の沖積平野に立地する。奥壁は巨石の一枚岩で、側壁は凝灰岩切石で胴張り気味に構築されていた。

最後に、古代の官衙・生産遺跡について記しておきたい。

風穴遺跡は、本古墳群中、最大の支群である日当山支群のH群に接する。大規模な楕円状の堅穴（内径約13m・深さ約2m）をなしており、堅穴中央部で奈良時代頃の須恵器大甕（内側に焼土が張り付けられていた）や堅穴の北側平坦地で焼土、木炭などが出土している。肝心の何を生産したのかがいまだ究明されていないが、他に類をみない特異な工房跡である。

兎田瓦窯跡は、風穴遺跡の南方約300mに位置する。多賀城創建期より若干古いものとみられる瓦を出土しており、所在地が未確定の柴田郡衙に供給した瓦窯跡ではないかも推測されている。



に位置する。

北方約1kmに位置する。前方部と中期以降の築造とみられている。いかとみられている。

塚古墳は、本古墳群の鹿野山支群

にも箱式石棺が埋葬施設となってい

ます。金銅装門頭太刀などを出土
古墳群などが盆地内の小丘陵斜面に立

付田盆地にみられるような大型の前
って造営されている。白石川右岸並
であるため、少数の横穴古墳群が
丘陵は、浸食をあまり受けていない
いる。

北西部の低丘陵地に立地しており、
布している。

20数基を数える。

立置する。県南地方最大規模とみら
1世紀の造営とみられている。

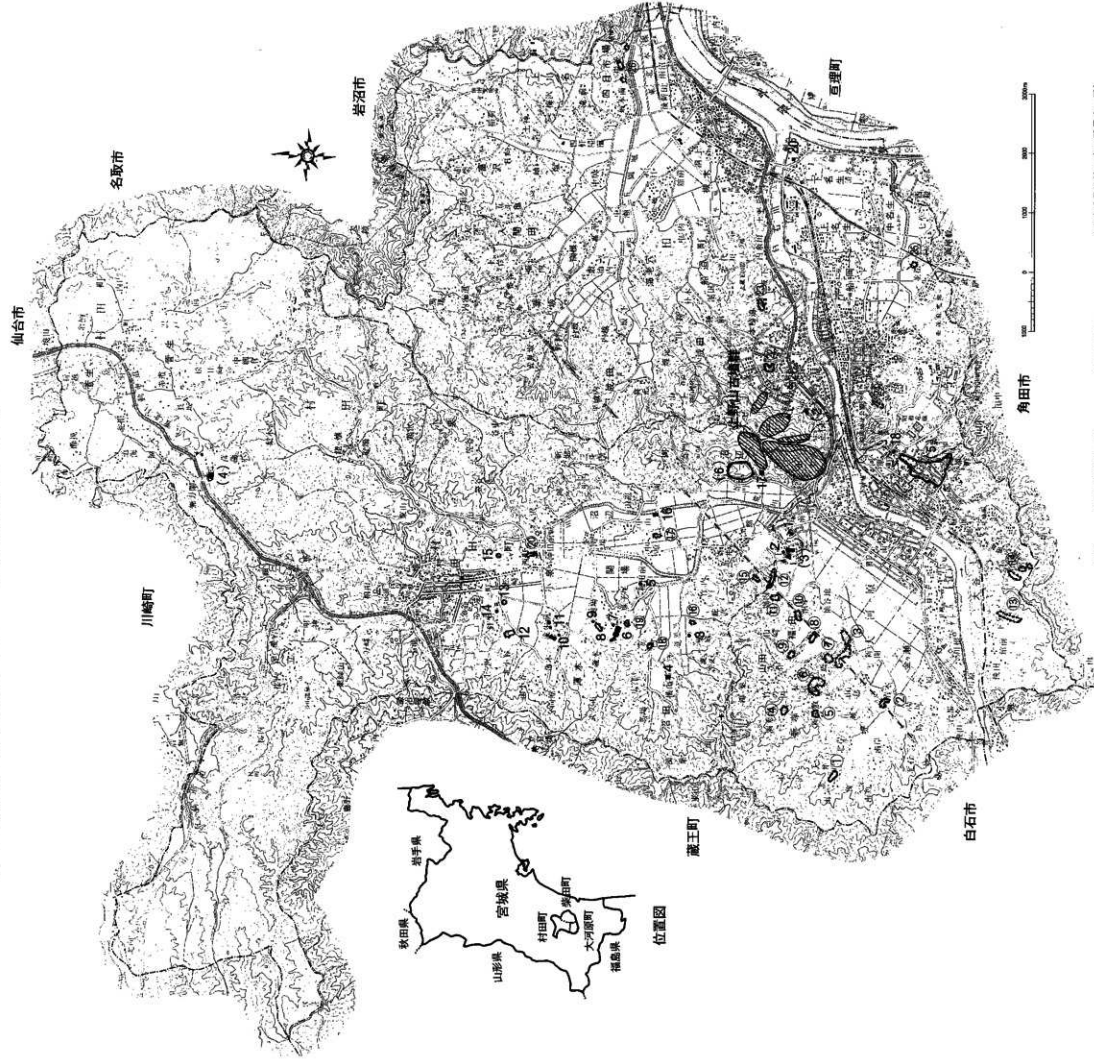
1し、48基を数える。

丘陵斜面に位置する。50~60基の横穴
みを有するものもある。鈴鐘・鏡・
とで著名である。

麓にあり、白石川右岸の沖積平野に
張り気味に構築されていた。

のH群に接する。大規模な裾鉢状の
部で奈良時代頃の須恵器大甕（内側
、木炭などが出土している。肝心の
みない特異な工房跡である。

賀城創建期より若干古いものとみら
れた瓦窯跡ではないかと推測され



- (遺跡番号は第1巻の番号と一致)
- 前方後円墳
 - 円墳
 - 古墳群・横穴古墳群
 - 位置不明の古墳
 - 生土運動
 - 生土運動以外の者
 - 出土土運動
- 凡例 上野山古墳群

第1図 上野山古墳群の位置と周辺の遺跡分布図

北日ノ崎窯跡は、千塚山古墳の西側に位置し、奈良時代前半頃の須恵器坏・甕類を焼成している。

中屋敷前遺跡は、船岡館山の西麓、沖積平野上に立地する。布目瓦が出土しており、郡衙跡の候補地としてみられてきたが発掘調査の結果、平安時代中頃の寺院跡の存在が明確になった。奈良時代頃の須恵器も出土しており、今後の調査の進展が待たれる。

鹿野山遺跡は、本古墳群の鹿野山支群C群の西方に位置する。縄文・弥生時代の遺跡とみられてきたが、『沼辺村史』によれば、ここから布目瓦が出土したと記している。(第1表)

第1表 白石川下流周辺の古墳と関連遺跡

I 高塚古墳

No.	古墳名	所在地	形態	出土遺物	遺跡番号
1	鳩館古墳	大河原町千塚前	前方後円墳 1基 <主軸長約 35m>		06005
2	千塚山古墳群	村田町沼辺字千塚	前方後円墳 1基 <主軸長約 85m>		07019
3	元窪古墳	村田町沼田字元窪	円墳 2基		07112
4	法領権現古墳	村田町沼田字弁天	円墳 1基	土師器	07065
5	雲南権現古墳	村田町開場字雲南	方墳 1基		07066
6	愛宕山古墳 薬師堂古墳	村田町開場字愛宕山他	前方後円墳 2基 <主軸長約 90m 同 35m>	円筒埴輪	07006
7	蛇口古墳	村田町開場字蔵本入	円墳(箱式石棺) 1基		07064
8	蔵本古墳群	村田町開場字蔵本	円墳(箱式石棺)		07063
9	坂下古墳群	村田町薄木字坂下	円墳(箱式石棺) 3基 方墳 1基		07102
10	方領権現古墳群	村田町薄木字金原	前方後円墳 1基 <主軸長約 64m>		07088
11	金原古墳群	村田町薄木字金原	円墳 2基 円墳 1基 方墳 1基		07100
12	上ヶ沢稲荷古墳群	村田町村田字上ヶ沢	円墳 1基		07087
13	針生古墳	村田町村田字針生	(前方後円墳?) 1基		07084
14	針生A古墳	村田町村田字針生	円墳 1基		07039
15	下ノ内厩古墳	村田町村田字下ノ内	(前方後円墳?) 1基 <濫減>	直刀、勾玉 円筒埴輪	07016
16	小塚古墳	村田町沼辺字小塚	(前方後円墳) 1基		07062
17	王壇塚古墳	村田町沼辺字鹿野二	方墳 1基		07081
18	石塚古墳	柴田町船岡字清住町	円墳 1基	須恵器(提瓶)	08071
19	牛堂(円山)古墳	柴田町船岡字新生町 <地点不明>	<濫減>	直刀、土師器 (甕・壺)・須恵器 (高杯・埴瓶)	
20	剣塚古墳	柴田町下名生字剣塚	円墳 1基		08067

II 横穴古墳群

No.	横穴古墳名	所在地	形態	出土遺物	遺跡番号
①	大井戸横穴古墳群	大河原町梶字大井戸	3基		06045
②	青木横穴古墳群	大河原町金ヶ瀬字青木	3基		06008
③	馬取前横穴古墳群	大河原町金ヶ瀬字馬取前	数基		06032
④	洞秀山横穴古墳群	大河原町新寺字洞秀山	数基		06030
⑤	新屋敷横穴古墳群	大河原町新寺字新屋敷	3基		06056
⑥	薬師横穴古墳群	大河原町新寺字薬師	2・4基		06013
⑦	坂下横穴古墳群	大河原町小山田字坂下	1・2基		06014
⑧	中山横穴古墳群	大河原町小山田字中山	3基		06016
⑨	三峰山古墳群	大河原町小山田字三峰山	8基		06080
⑩	荒屋敷横穴古墳群	大河原町福田字荒屋敷	7基		06022
⑪	山下横穴古墳群	大河原町福田字山下	2基		06021
⑫	打越横穴古墳群	大河原町福田字打越	4基		06006
⑬	上大谷横穴古墳群	大河原町大谷字船前	6基	刀子、土師器、須恵器	06024
⑭	上谷横穴古墳群	大河原町大谷字上谷	1・6基		06002
⑮	寄井横穴古墳群	村田町沼辺字日向他	3基		07028
⑯	元窪横穴古墳群	村田町沼辺字元窪	数基		07111
⑰	中山間横穴古墳群	村田町沼辺字中山間	数基	金銅製刀頭大刀、直刀、 金銅製耳飾、土師器	07008
⑱	下清水横穴古墳群	村田町沼辺字下清水	5基	須恵器、土師器、鉄鍬	07117
⑲	龍泉院横穴古墳群	村田町関場字砂子他	数基	須恵器(長頸瓶)、刀子	07007
⑳	古館横穴古墳群	村田町小泉字古館	3基	須恵器(甕)	07003
㉑	土合横穴古墳群	柴田町西船迫三丁目	1基 <甕減>		08094
㉒	森合横穴古墳群	柴田町西船迫一丁目	100基	土師器(筒・杯) 須恵器(長頸瓶・坏・甕)	08039
㉓	十八津入横穴古墳群	柴田町本船迫字十八津入	48基	鉄鍬、土師器、須恵器	08005
㉔	根形横穴古墳群	柴田町船岡西二丁目	数基		08070
㉕	船岡迫横穴古墳群	柴田町船岡字西迫	数基	須恵器	08088
㉖	炭釜横穴古墳群	柴田町四日市場字炭釜	50~60基	鈴銀、銅、金環、勾玉、切子玉 九玉、小玉、貝輪、直刀、鉄鍬、 鏝、紡錘車、土師器、須恵器	08018

III 古代官衙・生産遺跡

No.	遺跡名	所在地	出土遺物	遺跡番号
(1)	風穴遺跡	柴田町本船迫字鹿野	須恵器(大甕)	08002
(2)	埴田瓦窯跡	柴田町西船迫二丁目	布目瓦、須恵器	08001
(3)	北日ノ崎窯跡	村田町沼辺字北日ノ崎	須恵器(坏、甕、長頸甕)	07133
(4)	三本櫛窯跡	村田町足立字三本櫛	須恵器(坏、甕)	07084
(5)	中屋敷前遺跡	大河原町大谷字中屋敷前	布目瓦、須恵器(坏、甕) 土師器、須恵器	06036
(6)	鹿野山遺跡	村田町沼辺字鹿野二	布目瓦	07050

2 調査研究小史

この上野山丘陵地内に築造された小円墳群は、古くからその存在が知られていたものとみられ、江戸時代半ば頃から、すでに記録に残されている。主な文献と事蹟について年代順で紹介する。

最も古い文献としては、本古墳群に直接関わるものではないが、享保4年(1719年)、佐久間洞巖著の『奥羽観瀾聞老志』がある。同書は、「沼辺村に「戦士塚」があり、並神(上野山丘陵の南西端部)から30余町離れたところに、文治の役(1189年)の戦死者の墳墓がかつて累々とみられたが今や田畑として閉塞されてしまった。これを千塚と称した。」と記している。この記載からすると、現在、地名にも残る村田町沼辺字千塚地区の「千塚山古墳群」(前方後円墳1基・円墳2基)を指すものと推測される。大正時代にいたるまで、当地域の史書に強い影響を及ぼした。

約半世紀後の安永6年(1778年)、『柴田郡沼邊村風土記御用書出』は、本古墳群の数、規模などについて具体的に記載している。沼辺村(現村田町南部)内には併せて52基の古塚があり、並神山に1基、長窪山に43基、千塚山に8基みられるとし、これらはいずれも文治の役の戦死者の塚としている。そして、長窪山の古塚のうち、5基は高さが3尺、27基は2尺と記している。

昭和29年刊行の『沼辺村史』(薄木源壽著)は、戦後の新しい歴史観により、本古墳群を紹介している。「『柴田郡沼邊村風土記御用書出』記載の沼辺村内の古塚については、文治の役の塚も含まれるかもしれないが、大部分は、古墳時代の「古墳」である」と指摘し、さらに「沼辺村の古墳と密接な関係を有する古墳が、隣村槻木町(現柴田町)字船迫分にある」ことを言及している。また、昭和27年に鹿野山地区の古墳を発掘し、刀子1振、斎部土器(須恵器)が得られたとしている。

昭和30年刊行の『宮城県史』第16巻「観光篇」中の「船迫古墳群」の記載は、柴田町における最初の文献になる。「船岡町の北2km、船迫字上野山間一帯には、数十を数える直径3~10mの小円墳が数存在するが、ここから沼辺村にかけて多くの古墳がみられ、これらは立石長者が千の塚を築き千巻の庭を埋めたものである」と記している。

昭和40年代に入ると、上野山丘陵の南麓においてニュータウン造成工事(現船迫宅老団地)が計画されたが、事前の予備調査により、柴田町大字本船迫字寺後地内(現西船迫三丁目)で古墳群が発見されたため、昭和49年に3基、50年に1基の古墳の発掘調査を実施した。その結果、横穴式石室等が検出され、土師器甕、短頸甕(内外黒色)・鉄鍬・刀子などが出土したことから、これら的小円墳群は、古墳時代末期(7世紀後半から8世紀初頭)に築造された古墳であることが判明した。また、この地区で30数基の古墳(「寺後古墳群」と報告、本報告の寺後支群A群)が確認された。そして、この調査結果を踏まえ、柴田町教育委員会は、昭和49年7月に寺後古墳群を町の指定史跡とした。

さらに、寺後古墳群の発掘調査を契機として、柴田町では町史編纂事業が昭和48年に始まって、いたことも相俟って、上野山丘陵地内の古墳の分布状況について関心が高まり、分布調査が行われるようになった。折しも、上野山の南側斜面の樹木が伐採され、寺後地区と村田町長窪山地区の中間地帯に当たる日当山地区などにおいて、昭和51年の柴田町文化財保護委員による分布調査で約90基が確認された。

その結果、村田町の長窪山地区、柴田町の寺後及び日当山地区等に所在する古墳群を比較すると、外観的に規模・形態上の差異はなく、いずれもほぼ同時期に築造された共通の歴史的性格を有する古墳群と考えられるようになり、これらの古墳群は一体的に「上野山古墳群」と総称されることになった。

昭和55年には、葦神山西方の山の上地区が柴田バイパスの路線内に入ったため、1基の古墳（「山の上古墳」と報告、本報告の長窪山支群A群）が発掘され、石室の基底部が検出されるとともに、直刀・切子玉・須臾器などが出土した。

平成元年3月、『柴田町史（通史篇1）』が刊行され、それまでの本古墳群の発掘調査及び分布調査の成果を踏まえ、古墳群全体の分布状況と各支群の概要、古墳数などが紹介されるとともに、総数269基（柴田町域分189基・村田町域分80基）を数え、現存する県内最大規模の高塚群集墳であることが明らかにされた。

その後、上野山・葦神山の総合的な開発計画が構想され、当丘陵地内の古墳の分布状態について、さらに詳細な調査を行う必要が生じた。柴田町・村田町・大河原町共同推進事業協議会が中心となり、3町の文化財保護委員等により、分布調査が必ずしも十分でなかった地域を中心に、平成6年12月と7年2月に、計3回の分布調査を実施した。その結果、長窪山支群で新たに25基、その北方の鹿野山支群で11基をはじめとし、合計45基の古墳が新たに発見された。既に確認されている古墳に加えると、実に314基にも達し、現存する高塚古墳群としては、東北地方でも最大級の一大群集墳とみられるようになった。

3 古墳群の分布と立地の概要

本古墳群は、東西約1.5km、南北約1.4kmの広い範囲にわたって分布している。立地的には、上野山丘陵（標高207m）の山麓から丘陵頂上近く（9合目付近）にかけて築造されている。その分布状況を全体的に見渡すと、上記した範囲において一様に分布しているのではなく、幾つかのまとまりを持ちながら分布していることが観察される。すなわち巨視的にみると、この上野山丘陵を開析した支谷が大きな単位となっていることがうかがわれるのである。なお、上野山丘陵の南麓は、船迫ニュータウン造成工事により昔日の景観は大きく変容しており、上野山から派生し、寺後支群を挟んだ二つの舌状丘陵は、すでに失われている。

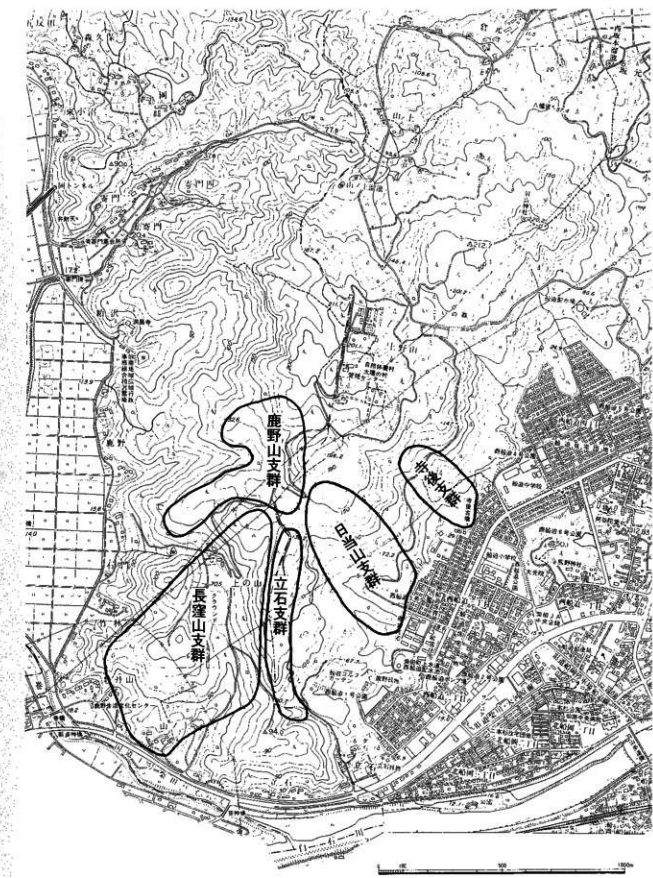
現在、東から順に、寺後支群、日当山支群、立石支群、長窪山支群及び鹿野山支群の5群に大別することができる。そして各支群内においては、さらに小支群が幾つかのまとまりを持ちながら分布している。

一般的に古墳が丘陵に築造される場合、丘陵上あるいはさらに派生した支丘陵上に築かれることが多いが、本古墳群では、上野山から派生した丘陵間の奥まった位置あるいは支谷の周囲の斜面に、大部分の古墳が築造されていることが大きな特徴である。

各支群の分布と立地状況については、後述するが、主な特徴、相違点について触れると、寺後支群と日当山支群は、上野山から派生した丘陵間の最奥部に位置し、寺後支群は低い小丘陵上に、日当山支群は山腹に立地している。立石支群はやや例外的で支谷を登り詰めた尾根上の平坦地に分布している。なお、これら3支群内の小支群の間では、立地上大きな違いは認められない。これに対して、長窪山支群は支谷を取り巻く丘陵斜面に築造されており、各小支群間で各々立地状況が異なっている。鹿野山支群は西方から入り込んだ支谷の北側斜面に立地している。

ところで、本古墳群の分布密度についてみると、古墳が著しく密集し、急傾斜地にもひしめくように築造されている一方、平坦な地であっても、その分布が希薄であったり、空白地域も存在する。こうしたことは、古墳を築造した被葬者集団の墓域は、あらかじめ特定されており、そうした墓域の範囲内で、古墳は順次築造されたものと考えられる。

なお、墳墓を築造した被葬者集団の集落について、推測を加えれば、寺後支群、日当山支群及び立石支群は柴田町の船迫・船岡方面、長窪山支群は大河原町方面、鹿野山支群は村田町方面を生活の本拠としていたものと考えられる。（第2図・第2表）



第2図 上野山古墳群分布図

第2表 上野山古墳群分布状況

平成7年5月30日現在

支群名	小支群	古墳数	備 考
寺後支群	A群	43基	柴田町域 (全部)
	B群	7基	
	計	50基	
日当山支群	A群	13基	柴田町域 (全部)
	B群	4基	
	C群	27基	
	D群	11基	
	E群	42基	
	F群	15基	
	G群	8基	
	H群	1基	
	計	121基	
立石支群	A群	1基	柴田町域 12 村田町域 2
	B群	13基	
	計	14基	
長窪山支群	A群	3基	村田町域 (全部)
	B群	2基	
	C群	38基	
	D群	5基	
	E群	16基	
	計	64基	
鹿野山支群	A群	47基	村田町域 59 柴田町域 6
	B群	6基	
	C群	11基	
	D群	1基	
	計	65基	
合 計		314基	柴田町域 189 村田町域 125

<参考> 県内の大規模な古墳群(高塚)

台町古墳群(丸森町)	208基	
色麻古墳群(色麻町)	163基	(推定約500基)

4 各支群の概要

本古墳群の分布状況の概要がほぼ把握されるようになったので、各支群及び支群内の各小支群の位置・立地・分布形態・特徴等について要約しておきたい。なお、支群内の各小支群の区分は、現時点の暫定的なものであり、将来さらに細分・再編成される余地がある。また、小支群内の古墳数は、詳細な分布調査を実施すれば、さらに増加する可能性がある。なかでも箱式石棺は、墳丘を持たないため、見落としている可能性があることを付け加えておきたい。

(1) 寺後支群

上野山から南東方向に派生した二つの丘陵(現在、これらの丘陵は船迫団地造成により失われている)間の最奥部、小丘陵上に形成された一群である。旧地名、本船迫宇寺後地区(現「西船迫3丁目」)の山麓から丘陵の中腹にかけて立地している。これからは、分布のまとまりの状態から大きく二つに分けられる。(第3図)

A群: 昭和49年に発掘調査を実施した寺後2号墳(標高28m・本古墳群中最も低い位置にあった)を南端として、ほぼ北西方向に43基が帯状に分布している。小丘陵上の緩やかな傾斜地に立地している。このA群はさらに細分されそうであるが、詳細は後日の研究に譲りたい。なお、この群の麓に柴田町教育委員会により、「寺後古墳群」の標柱が立てられている。(第4図)

B群: 北西方向に分布するA群の延長線上にあり、丘陵中腹を横断する林道の北側に位置する。傾斜地に7基が点在する。

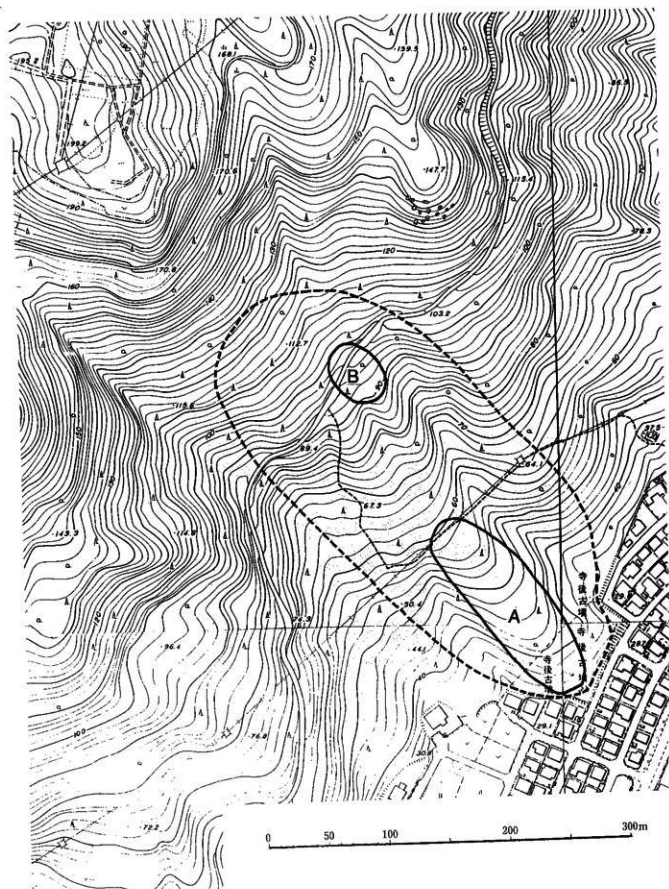
(2) 日当山支群

上野山から南東方向に派生した丘陵間の最奥部、通称日当山という南向きの幅の広い山腹に形成された一群である。全体的には、北西方向に分布しており、総数120基余りを数える。本古墳群中、最大の支群である。他の支群と比べ密集度が最も高く、墳丘を接して築造されているものが多い。また、急傾斜地に立地するものもある。これらは、分布のまとまりの状態から、さらにA群からH群の小支群に分類される。(第5図)

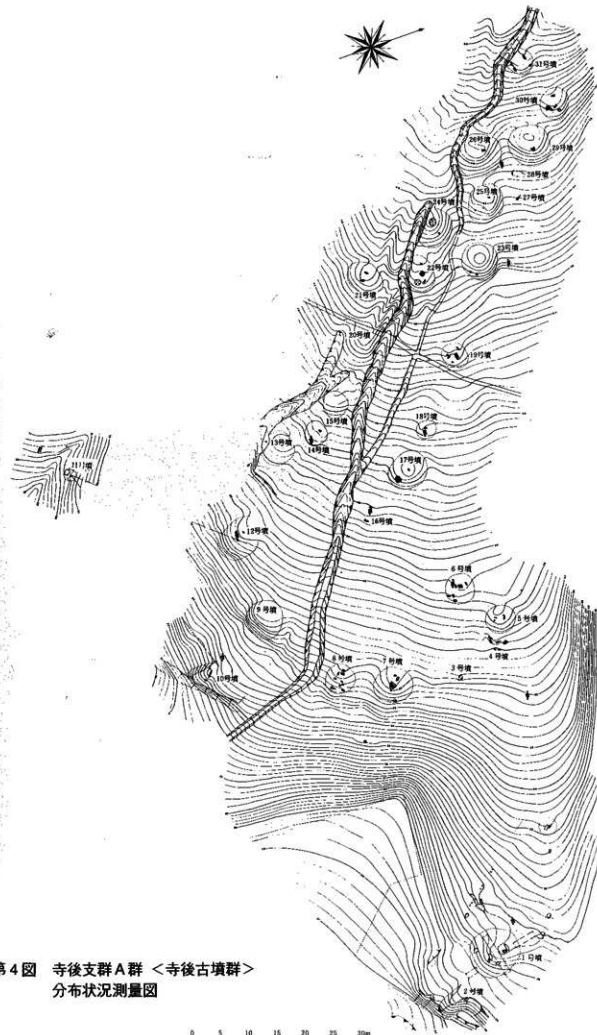
A群: 山麓付近の鉄塔の東側にある。丘陵裾部の緩斜面に立地し、ほぼ南北方向に13基が帯状に分布している。

B群: A群から西方へ100mほど離れた地点に位置する。墳丘の低い小規模なものが4基点在している。

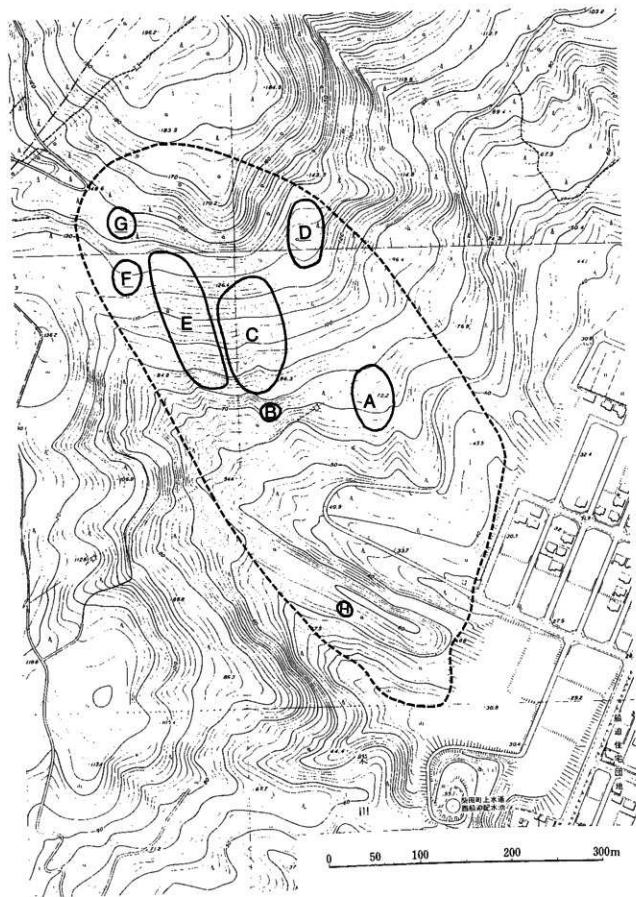
C群: B群の北側に位置する。傾斜地に27基が帯状に分布している。斜面北側の方が密集度が高く、急斜面に立地している。これも細分される可能性がある。



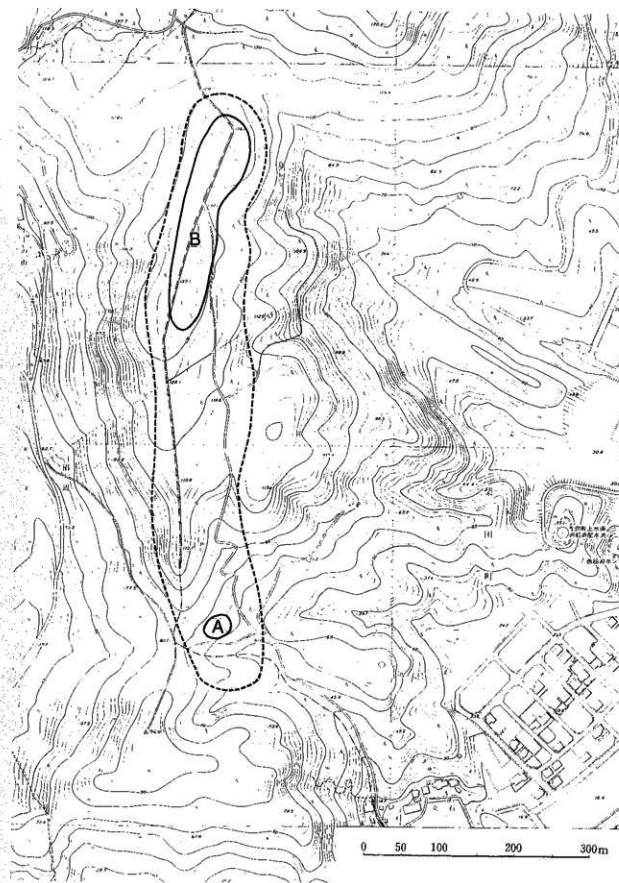
第3圖 寺後支群分布圖



第4圖 寺後支群A群 <寺後古墳群> 分布狀況測量圖



第5图 日当山支群分布图



第6图 立石支群分布图

D群：C群から北東方向に位置し、丘陵中腹の平坦地南縁部に立地している。南側は急峻な傾斜をなしている。ほぼ東西方向に11基が帯状に分布している。墳丘が明瞭で規模の大きなものが多い。

E群：C群の西側に位置し、ほぼ北西方向に42基が分布する。丘陵斜面を横断する山道の北側付近が最も密集している。これも細分される可能性がある。

F群：E群の西側に位置し、浅い沢がE群とF群とを隔てている。若干せりだした丘陵緩斜面に15基が点在する。箱式石棺が多い。

G群：F群の北側に位置する。傾斜地に8基が点在している。日当山支群の中で最高所（7合目付近）に立地する。墳丘は他の小支群に比べて差異はない。

H群：F・G群の西側から尾根が南北方向に延びているが、この尾根の西側斜面に「風穴遺跡」と呼ばれ、奈良時代頃の須恵器大甕が出土した工房跡が存在する。この遺跡の南側に隣接して、石室の奥壁などが露呈した1基の円墳が存在する。なお、この古墳は、A～G群と比べて立地的に異例であり、工房跡の関係者の墳墓ではないかとする見方もある。A～G群とは隔たっているが、一応この支群に含めた。

(3) 立石支群

両町の境界付近、柴田町本船迫立石地区から入り込んだ支谷を登り詰めた尾根上の平坦地に形成された一群である。分布は希薄であり、最も数の少ない支群である。ほとんどは柴田町の区域内に所在する。（第6図）

A群：支谷内の斜面を登る途上の緩傾斜地に、墳丘の低い古墳が1基存在する。

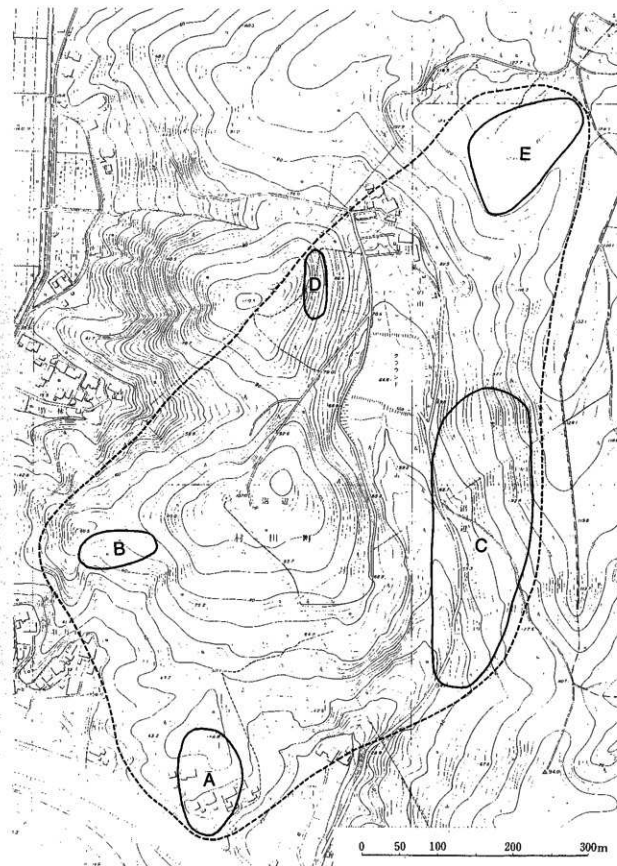
B群：支谷から尾根状の平坦地に入り込んだ浅い沢に沿って、ほぼ南北方向に8基が列をなして分布している。墳丘の明瞭なものが多い。さらにその北方に、墳丘の低い古墳が5基点在する。

(4) 長窪山支群

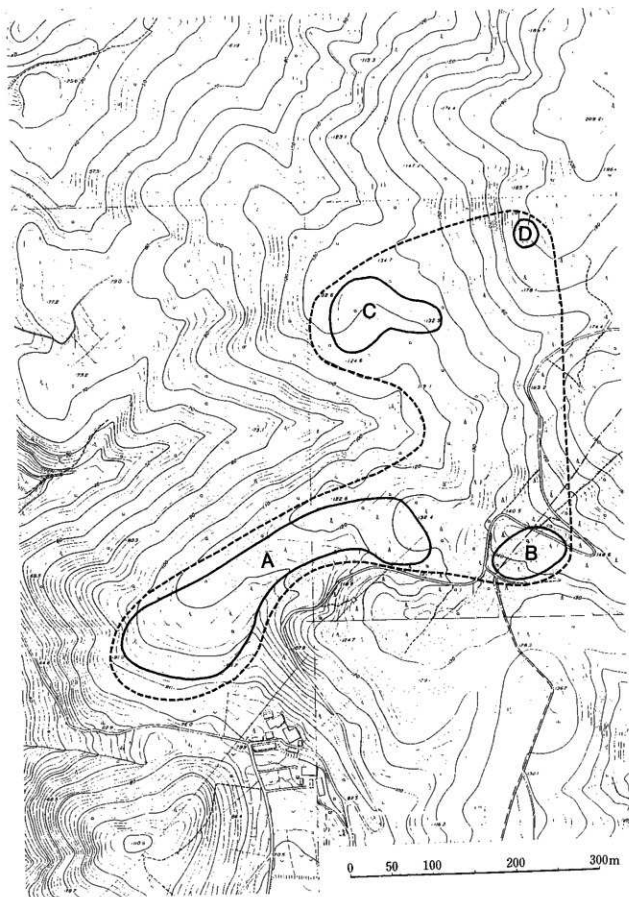
上野山から派生した丘陵の南端、葦神山の西側に、白石川方面から北方に入り込んだ奥形の深い支谷の周囲を中心に形成された一群である。これらは、さらに小支群に分けられるが、各々立地状況が異なっている。全て村田町の区域内に所在する。（第7図）

A群：支谷を挟んで葦神山と対峙する丘陵南端部、村田町沼辺字山の上地区に1基の古墳が存在したが、柴田バイパスの路線内となったため、昭和55年発掘調査が実施（「山の上古墳」と報告）された。破壊が著しく、石室基底部と右支門が検出されたにとどまったが、直刀・切子玉などが出土した。この古墳の北方、民家の北側にも2基分布する。

B群：A群の北北西に位置し、丘陵の南側斜面に2基分布する。



第7図 長窪山支群分布図



第8図 鹿野山支群分布図

C群：支谷入口から約400mほど入った東側斜面に立地している。ほぼ南北方向に38基が帯状に分布している。

D群：C群から支谷を隔て、北西方向に位置する。急峻な西側斜面に墳丘の明瞭な古墳が5基分布する。

E群：D群から支谷を隔て、北東方向に位置する。上野山から南西方向に張り出した丘陵中腹の平坦地に立地する。白石川方面と村田盆地の双方から入り込んだ支谷の直交する支谷谷頭にもあたる。微地形的には、白石川方面へ開口した支谷から沢が北東方向に入り込んでいるが、その沢に沿って、平坦地南縁部に13基が帯状に分布している。さらに、その西方の平坦地にも3基点在している。そのうち鉄塔北側にある1基は、『村田町史』にも紹介されている。石室が露呈しており、石室の構造がよく観察される。支室の平面形は胴張り型で、奥壁は一枚石、玄門柱上に楣石が架けられている。(以下「長窪山支群E群1号墳」と仮称する)このE群付近からは、村田盆地が眺望される。なお、このE群は、これまでの経緯もあり、一応長窪山支群に含めたが、次の鹿野山支群に位置づけられる可能性もある。この点については、今後の研究課題としたい。村田町教育委員会により、林道の近くに「長窪山古墳群」の標柱が立てられている。

(5) 鹿野山支群

村田盆地から東方に入り込んだ支谷を中心に形成された一群で、上野山から西方に延びた丘陵の南側斜面に立地する。(第8図)

A群：長窪山支群E群の北西方向に位置し、上野山丘陵から西方に延びた舌状丘陵の南側傾斜地に立地する。村田町大字沼辺字石門地区から入り込んだ沢に沿って、ほぼ東北方向に分布する。西側の21基は面的な分布状態を呈している。中間部の19基は最初が列状に、途中から帯状の分布状態となる。ここから若干距離を隔て奥まったところにある東端部の7基はほぼ南北方向の帯状に分布する。全体的には墳丘が低く、奥壁・玄門が外観的にうかがえないものが多い。これもさらに細分されそうである。なお、このA群西端部の北西方向に王塚塚古墳(方墳)があり、本古墳群の盟主的墳墓ではないかとする見方もある。しかしこの古墳は、丘陵の北側斜面に立地しており、本古墳群のほとんどが南側斜面を中心に立地している点からすると異例であり、また当古墳の周囲に本古墳群のような円墳はみられず、独立墳のように見える。本古墳群との関係は今後の研究課題としたい。

B群：A群の東方、長窪山支群E群の北東方向に位置する。丘陵中腹の平坦地に墳丘の明瞭な古墳が6基列をなして分布する。

C群：鹿野山の東方、A群の北側に位置し、上野山から張り出した丘陵の南側斜面に立地する。西側の9基は面的な分布状況を呈し、墳丘の明瞭なものが多い。ここから東

第3表 本報告と柴田町史の支群・小支群の変更

本報告の支群	本報告の小支群	『柴田町史』通史篇1 に記載の長窪山支群	備 考
長窪山支群	A群 3基	A群 3基	変更なし
	B群 2基	—	新規発見 2基
	C群 38基	B群 34基	新規発見 4基
	D群 5基	C群 3基	新規発見 2基
	E群 16基	E群 16基	変更なし
	小計 64基	56基	新規発見 8基
鹿野山支群	A群 47基	D群 2基・G群20基	新規発見 25基
	B群 6基	F群 6基	支群替え
	C群 11基	—	新規発見 11基
	D群 1基	—	新規発見 1基
	小計 65基	28基	新規発見 37基
計	合計129基	84基	新規発見 45基

方に若干距離を隔てて2基分布する。

D群：C群の北東方向の傾斜地に1基存在する。現在知られる限りにおいて、本古墳群の中で、最高所（9合目付近）に立地するものである。

(注) 今回の分布調査により、鹿野山地区において、C群11基、D群1基の存在が知られ、これらは村田盆地に居住した被葬者集団の墳墓と推定された。また、『柴田町史（通史篇1）』において長窪山支群に分類した小支群のD・F・G群は、鹿野山支群に位置付けるのが相当と考えられたので、今回分類替えをした。さらに、同書でのF・G群は、今回の調査により連続していることが判明したので、一括して鹿野山支群のA群とした。これらの変更は第3表のとおりである。

5 古墳の構造と副葬品

本古墳群は、既に述べたとおり、寺後支群A群（寺後古墳群）で4基、長窪山支群A群（山の上古墳）で1基の発掘調査が行われている。また、長窪山支群E群1号墳をはじめとして石室が露呈しているものが数例ある。さらに地表から奥壁・玄門が観察されるものも相当見られる。現時点の知見に基づき、本古墳群の古墳の構造、副葬品の特徴について記しておきたい。

(1) 形態（墳形・墳丘等）

本古墳群内の古墳を全体的に見渡すと、基本的には、墳丘を有し横穴式石室を構築する円墳が主体を占め、それに若干の墳丘のない箱式石棺によって構成されるようである。因みに寺後支群A群中、地形測量を実施した、規模不明の1基を除く31基の内訳は、円墳が28基で約9割を占め、箱式石棺が3基で約1割となっている。ただし、若干例外的なものも一部にみられる。（注）

円墳の墳丘は著しく小さい。規模を計測した寺後支群A群中、28基の円墳についてみると、直径は最小2.5m、最大9.0m、平均5.8mである。高さは最小0.5m、最大2.0m、平均1.0mであった。他の支群内の古墳と比べてもそう大きな差は認められない。

周濠は、大半の円墳では地表観察からは認められないが、規模の大きな古墳では、浅い周濠が巡っているものも存在する。（第4表）

第4表 寺後支群A群規模計測値一覧表

石室群別	長径	短径	高さ	備 考	長径・短径		高さ	備 考	
					長径	短径			
1号墳	9 ^m	8.5 ^m	1.62 ^m	横穴式石室 土師器(壺)	17号墳	7 ^m	5 ^m	0.86 ^m	
2号墳	5.5	3.5	1.6	横穴式石室 須恵器(壺)	18号墳	4	3.5	0.38	
3号墳	墳丘なし			箱式石棺	19号墳	5	4	0.83	
4号墳	-	-	-		20号墳	5		0.45	
5号墳	5		0.68		21号墳	7	5	0.72	
6号墳	5		0.48		22号墳	6	5	0.78	
7号墳	6.5		0.95		23号墳	6.5		0.93	
8号墳	5		0.97		24号墳	7		0.94	
9号墳	6.5		1.57		25号墳	7	6.5	1.26	
10号墳	6	5	1.46		26号墳	8		1.56	
11号墳	2.5	2	0.64		27号墳	墳丘なし		箱式石棺	
12号墳	8	6.5	2.0		28号墳	墳丘なし		箱式石棺	
13号墳	5.5		0.85		29号墳	7.5		1.56	
14号墳	4.5		0.65		30号墳	5.5	5	1.22	
15号墳	5		0.97		31号墳	4.5		0.81	
16号墳	3.5		0.45		32号墳	7	5	1.16	

(2) 埋葬施設

以下の記載は、発掘調査を実施した寺後支群A群1～3号墳(寺後古墳群1～3号墳は以下便宜的に「寺後1～3号墳」という)及び長窪山支群A群1号墳(以下、便宜的に「山の上古墳」という)の報告結果を中心とするが、石室の原形がほぼ保たれているとみられる長窪山支群E群1号墳などの石室が露出した古墳等の観察結果も適宜加えることとした。

なお、埋葬施設の石材は、この上野山の基盤岩であり、丘陵中腹から頂上付近にかけて露呈、散在している玄武岩などの割石を用いて構築している。

ア 横穴式石室

石室全体の規模は、小さく高さも低い。実質的には堅穴式石室の機能を果たしたとみられるものが多いが、長窪山支群E群1号墳のように玄門の上に楣石が架けられたものもある。全長は、寺後1号墳では3.7m、山の上古墳では4.2mであった。側壁の高さは、寺後1号墳では0.7m、長窪山支群E群1号墳では1.3mであった。石室の構造は、玄室と羨道部からなり、玄室と羨道は、玄門と楣石によって区分されている。

玄室は、長さが1.9mから2.4m程度で、幅が最大で0.9mから1.7m程度である。なお、奥壁・玄門柱石が外観的に観察されるものうち計測した13基についてみると、奥壁から玄門までの長さは最小1.6m、最大2.3m、平均2.0mであった。

玄室の平面形は、胴張り状の長方形を呈する。特に、長窪山支群E群1号墳は、明瞭な胴張り型である。奥壁を一枚石で構築したものは、奥壁石と側壁石が直接に組み合っている。

奥壁は、扁平で大型の一枚石を立てたものが多い。長窪山支群E群1号墳は、高さが1.4m、横幅が0.9mと縦長の奥壁であったのに対して、寺後1号墳は、高さが1.0m、横幅が1.5mと横長であった。なお、長窪山支群E群1号墳では、奥壁石の下に土台となる石がすえられていた。山の上古墳では、側壁と同様に構築されていたと報告している。

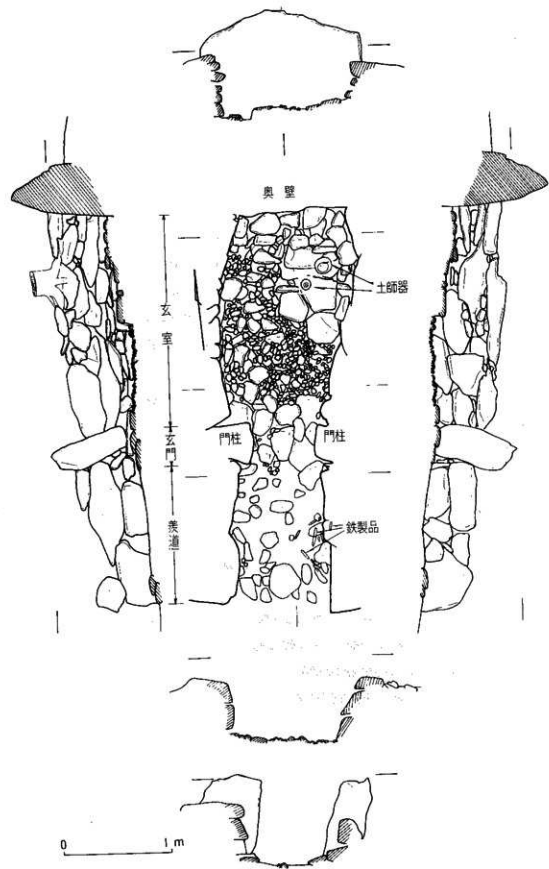
側壁は、小口積みを主体とした乱石積である。長窪山支群E群1号墳では、小口面を横長、扁平な石で揃え、概ね水平に積み上げている。長窪山支群E群1号墳の右玄門に接した部分では、11段の横石であった。立面的には、長窪山支群E群1号墳では、上部に行くにつれて幅が狭まり持ち送り状に構築されている。

床面は、河原石の小円礫が敷き詰められている。寺後1号墳では、奥壁近くに扁平な割石を敷き詰めて段が設けられていた。

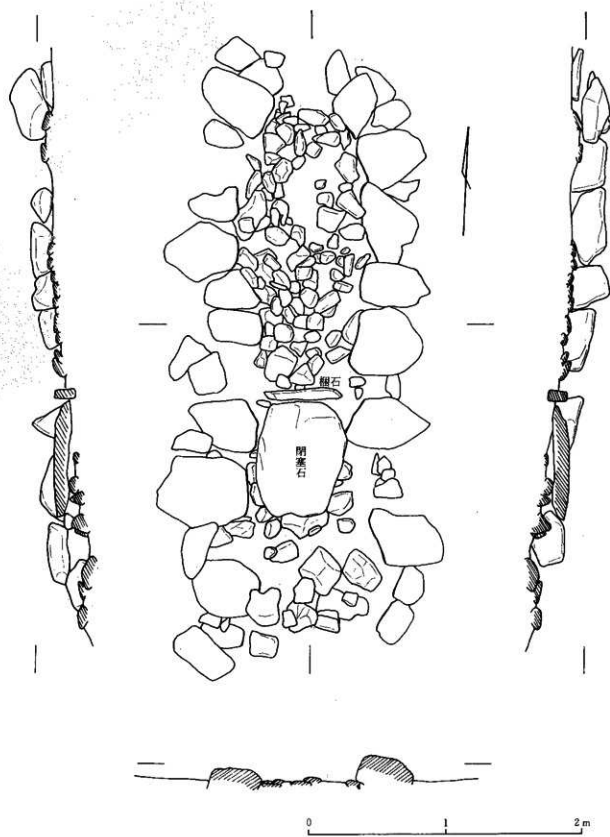
玄門は、扁平な柱状の石を立てて門柱としている。高さは0.75m～1.1m程度である。寺後1号墳、長窪山支群E群1号墳では、門柱の下に土台となる石が据えられていた。また、長窪山支群E群1号墳では、玄門の上に側壁同様の石を一段挟んで、横幅1.2m、奥行0.9mの楣石を架構していた。

楣石は、寺後2号墳では、細長の石材を一つ配置しており、山の上古墳では、円礫を数個配列していた。

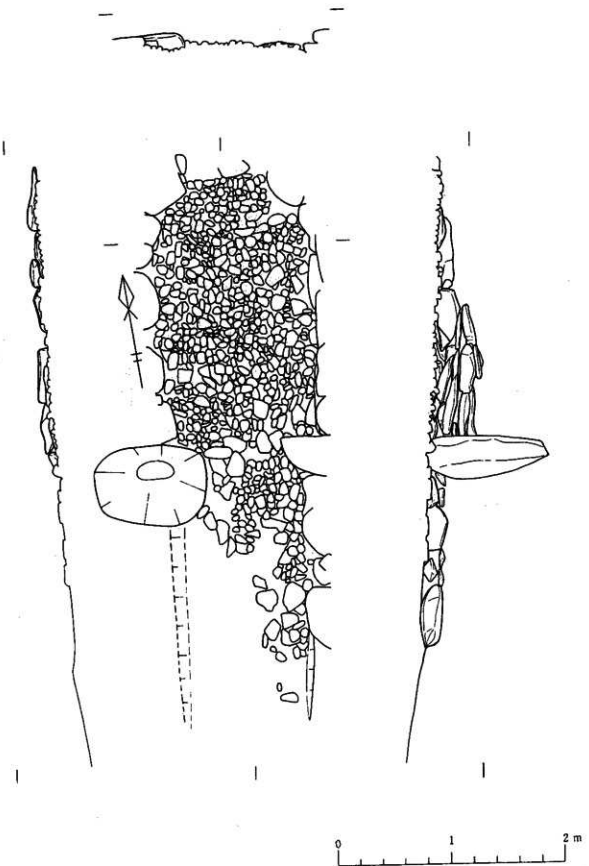
羨道は、側壁と同様に構築されている。羨道の長さは、玄室の長さと同関係にあるように、玄室の長さの4分の3程度である。寺後1号墳では、羨道の玄門前に閉塞石が積まれていた。(第9・10・11図・第5表)



第9図 寺後支群A群1号墳(寺後古墳1号墳)石室実測図



第10図 寺後支群A群2号墳(寺後古墳2号墳)石室実測図



第11図 長窪山支群A群1号墳(山の上古墳)石室実測図

第5表 横穴式石室等計測値一覧表

I 横穴式石室

区分		寺後1号墳	寺後2号墳	山の上古墳	長窪山支群 E群1号墳	備考
奥壁	高さ	1.00m	不明	-	1.43m	寺後1号墳は一枚石。 山の上古墳は側石と同様。
	幅	1.50m	不明	-	0.90m	
玄室	長さ	2.10m	2.20m	2.40m	2.38m	奥壁～榭石中央
		1.90m	-	2.40m	2.31m	奥壁～玄門内側
	幅	0.95m	0.45m	1.20m	0.72m	奥壁部
		1.25m	0.90m	1.40m	1.69m	最大部
		0.85m	0.60m	1.20m	1.04m	玄門部
	高さ	0.65m	不明	不明	1.34m	側壁最高部
玄門	高さ	0.75m	不明	1.10m	0.99m	床面～玄門頂部
	奥行	35～40cm	不明	0.40m	0.15m	
	横幅	30～55cm	不明	1.00m	不明	
榭石		配石(不明瞭)	細長の石材	列石	不明	
楣石	厚さ	不明	不明	不明	0.42m	
	奥行	不明	不明	不明	0.86m	
	横幅	不明	不明	不明	1.17m	
羨道	長さ	1.60m	1.70m	1.80m	不明	榭石中央～側壁
	全長	3.70m	3.90m	4.20m	不明	奥壁～羨道側壁

(注) 寺後2号墳及び山の上古墳は、破壊が著しく、側壁は基底部付近が残されていただけである。なお、寺後2号墳の奥壁は、抜かれたのか、元も存在しなかったのか不明である。

II 箱式石棺

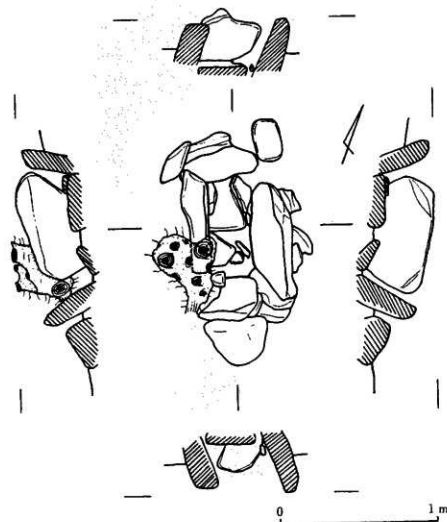
区分	長さ	幅	高さ
寺後3号墳	0.60m	0.35m	0.35m

(注) 石棺の歪みが著しいため、石棺内側底部を計測した数値である。

イ 箱式石棺

割石を縦位にして囲むように造られた小規模なものである。寺後3号墳では、長径60cm、短径35cmであった。(第12図)

(注) 上記のような形態の横穴式石室と箱式石棺の外に、墳丘を有するものの中で、玄門がなく、いわゆる袖無型の長方形を呈する竪穴式的石室が1例(日当山支群C群)ある。また、墳丘がなく、奥壁・玄門を有するものが2例(日当山支群C群)知られている。



第12図 寺後支群A群3号墳(寺後古墳3号墳)箱式石棺実測図

(3) 副葬品

次に掲げる副葬品は、寺後1・2号墳及び山の上古墳から発掘調査によって出土したものである。

ア 土師器

- ① 碗 : 器内外面とも磨きされており、内面は黒色処理されている。

[寺後1号墳女室内出土] (第13図1)

- ② 短頸壺 : 外面は磨きされ、内外面は黒色処理されている。

[同上] (第13図2)

- イ 須恵器 : 短頸壺で、内外面にロクロ調整痕がみられる。

[寺後2号墳石室周辺出土]

- ウ 直刀 : 2点。平棟・平造りである。いずれも破損している。

[山の上古墳支室床面及び石室内出土] (第13図11・12)

- エ 刀子 : 2点。平背直身でいずれも破損している。

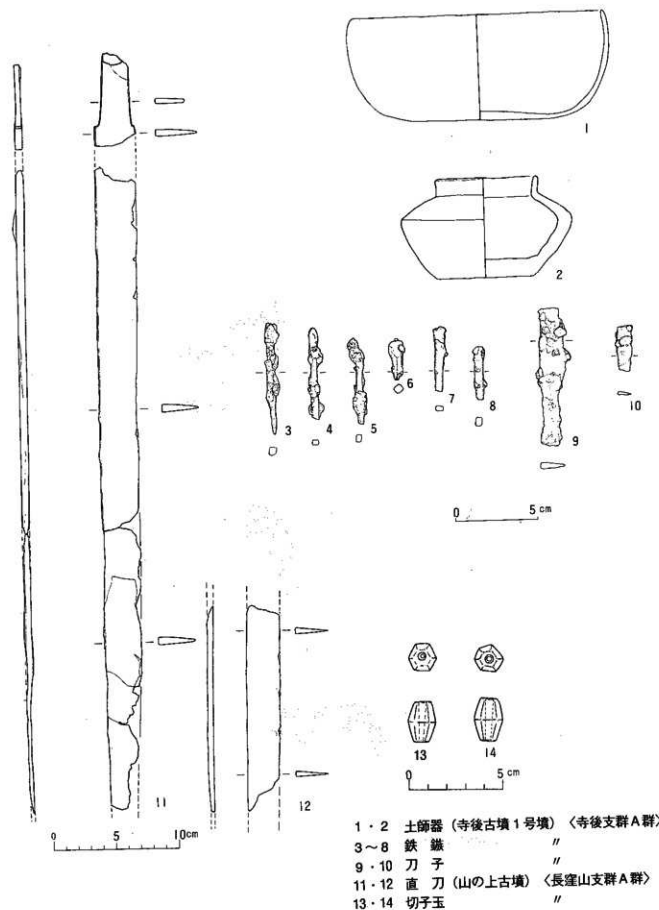
[寺後1号墳玄門前の右側壁周辺出土] (第13図9・10)

- オ 鉄鏃 : 6点。鏃先は柳葉形である。

[同上] (第13図3~8)

- カ 切子玉 : 2点。水晶製。

[山の上古墳羨道床面及び崩壊土出土] (第13図13・14)



第13図 副葬品実測図

6 まとめ

上野山古墳群は、これまでみてきたように、古墳群全体の分布状況がほぼ把握されるようになり、314基にも達する一大群集墳であることが明らかになった。現存するものとしては、東北地方最大規模の高塚古墳群とみられる。

ところで、本古墳群の一部の古墳については、発掘調査が実施され、構造・副葬品等も明らかにされている。ただ、古墳群の全体の割合からすれば、約1%の内容に過ぎず、本古墳群の性格、歴史的意義を詳細に考察するには、必ずしも十分ではないが、すでに一定の見解も示されているので、これらを踏まえながら、今後の課題について整理し結びとしたい。

まず、築造年代については、古墳時代末期、7世紀後半から8世紀初頭にかけて築造されたものと見られている。他方、石室の形態、出土した土師器などの特徴から、奈良時代の築造ではないかとする指摘もある。確かに形態的には、小規模でかつ形式化した石室を持つ古墳が多いことは間違いないが、寺後1号墳のような低い石室のものだけでなく、長窪山支群E群1号墳のように、石室の側壁が上部で持ち送り状に積み上げ、玄門の上に楣石を架けているものも存在することに注意すべきである。

いずれにしても、発掘調査が実施されて、時代の判定の資料となる副葬品が出土したのは、寺後支群、長窪山支群の南端部の3基に過ぎないことを勘案すれば、今後は、本古墳群の形成過程、ことに古墳群築造が開始された地域について究明する必要がある。そして、それは比較的平坦な地に築かれた規模の大きな古墳の調査によって明らかにされるのではないかと考えられる。しかも、そのことは本古墳群の性格の解明にもつながる重要な作業となるであろう。

次に、本古墳群内の支群は地縁的關係を、さらに小支群あるいは小支群内の数基からなる単位群は血縁的關係を推測させるものであるが、これらを含む被葬者集団全体の性格はどのようなものであったのか、言い換えれば、どのような政治的地位を占める集団であったのかが重要な問題であろう。この点については、本古墳群の立地上の在り方が一つの示唆を与えるものと考えられる。つまり、柴田郡内で最も古くから古墳文化が発達し、首長墓が多数築造された村田盆地、さらに後期以降、急激に横穴古墳群が造営された白石川流域に臨んで立地し、こうした地域のはば中央に位置していること、加えて、本古墳群の周囲には、年代的に、近接した時期あるいはほぼ同時期とみられる生産遺跡などが立地していることであろう。とりわけ、本古墳群中、最大の支群である日当山支群の至近距離に立地している点が興味深い。

こうしたことから、本古墳群は、やはり古代柴田郡の創設に関わりをもった支配者階層の墳墓とみてよいのではないだろうか。

一方、本古墳群は、全体的に均質的な古墳群の集合体であることが大きな特徴であって、丸森町の台町古墳群や白石市の鷹ノ巣古墳群のように、中期頃に前方後円墳や一際規模の大きな円墳などの盟主的墳墓の築造が開始され、その周囲に円墳群が継続的に形成された古墳群とは異なっている。

る。そして、このことは本古墳群が、古墳時代末期あるいは奈良時代頃に、急速に爆発的に築造されたことを物語るものである。

では、本古墳群の被葬者集団が、この上野山を墓域として、石室の規模などの面で極めて規制が強化されながら、これだけの一大高塚古墳群を築造することになった契機が何かなるものであったのか最大の問題ではなからうか。

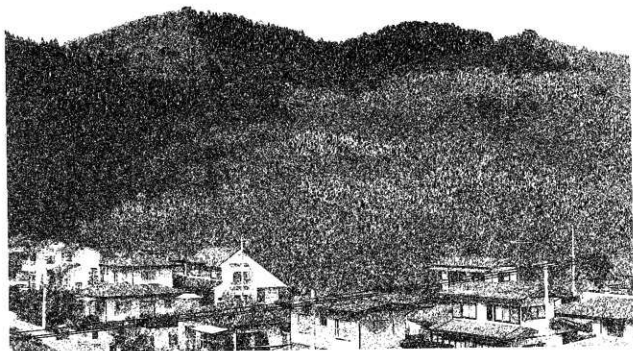
大化の改新(645年)直後頃には、陸奥国は成立しており、柴田郡の建郡もその頃ではなかったかとするのが大方の見方である。また、『続日本紀』によれば、養老5年(721年)に柴田郡から刈田郡を分置したということが特筆されている。おそらくこの頃の、こうした政治的情勢の変化が、本古墳群の築造に深く関係しているのではないだろうか。なお、『和名類聚抄』によれば、古代柴田郡には、「新羅郷」という朝鮮半島からの移住者集団とみられる集落が存在したことが知られており、そうしたことも一応視野に入れておいた方がよいであろう。

ともあれ、上野山古墳群は、古代柴田郡が創設された頃に政治的事情を反映して築造されたものと推定され、こうした問題の鍵を握る重要な史跡といえる。

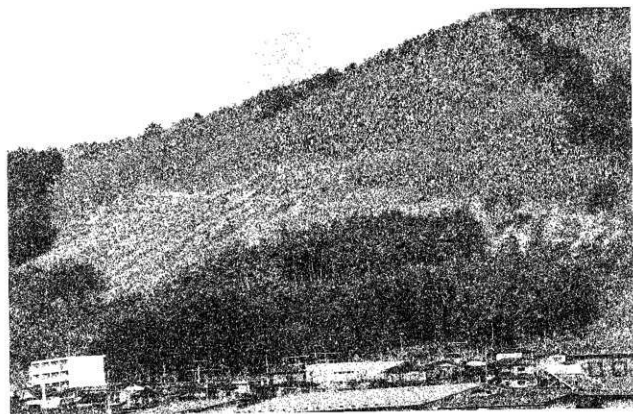
引用・参考文献

- 佐久間潤蔵 享保4年(1719):『奥羽観聞老志』巻之四(『仙台叢書奥羽観聞老志』上)
安永6年(1778):『柴田郡沼邊村風土記御用書出』(『宮城県史』第23巻風土記)
- 薄木 源輔 昭和29年(1954):『沼辺村史』:沼辺村役場
宮 城 県 昭和30年(1955):『宮城県史』第16巻観光
小野 力 昭和31年(1956):『陸前国柴田郡中山開古墳出土土門頭太刀について』『柴田史談』第1集
東北学院大学 昭和45年(1970):『柴田郡観木殿釜横穴古墳群第一次調査報告』『温故』6
考古学研究所
白石市教育 昭和47年(1972):『白石市郡山横穴古墳群発掘調査概報』『白石市文化財調査報告書』第11集
委員会
白石市教育 昭和47年(1972):『麁塚古墳群第一次調査報告』『白石市文化財調査報告書』第12集
委員会
柴田町教育 昭和49年(1974):『柴田町の文化財—遺跡と遺物—』『柴田町の文化財』第5集
委員会
志間 泰治 昭和51年(1976):『寺後古墳群』『柴田町文化財調査報告書』第8集 柴田町船泊ニュータウン
地内遺跡調査報告
白 石 市 昭和51年(1976):『白石市史』別巻考古資料篇
氏家 和典 昭和52年(1977):『仙台平野における横穴式石室古墳について』『研究紀要』Ⅷ
宮城県多賀城跡調査研究所
- 村 田 町 昭和52年(1977):『村田町史』
白 石 市 昭和54年(1979):『白石市史』通史編Ⅰ
芳賀 寿幸 昭和54年(1979):『石塚古墳』『柴田町文化財調査報告書』柴田町教育委員会
千葉 宗久 昭和56年(1981):『山の上古墳』『宮城県文化財調査報告書』第76集 東北地建バイパス関連
遺跡調査報告書 宮城県教育委員会
- 宮 城 県 昭和56年(1981):『宮城県史』34巻 史料集Ⅴ考古資料
佐々木安彦 昭和57年(1982):『坂下古墳調査報告書』『村田町文化財調査報告書』第3集 村田町教育委員会
大 河 原 町 昭和57年(1982):『大河原町史』通史編
柴 田 町 昭和58年(1983):『柴田町史』資料篇Ⅰ
高倉 敏明 昭和58年(1983):『宮城県四日市場炭釜横穴古墳群C地区発掘調査報告』『柴田町史』資料篇Ⅰ
柴田町
- 吉川 一明 昭和59年(1984):『色麻古墳群』『宮城県文化財調査報告書』第100集 宮城県営園地整備等
関連遺跡詳細分布調査報告書(昭和58年度) 宮城県教育委員会
- 佐々木和博 昭和60年(1985):『色麻古墳群』『宮城県文化財調査報告書』第103集 昭和59年宮城県営園地整備等
関連遺跡詳細分布調査報告書 宮城県教育委員会
- 古川 一明 昭和63年(1988):『北日ノ崎築跡』『村田町文化財調査報告書』第7集 村田町教育委員会
- 柴 田 町 平成元年(1989):『柴田町史』通史編Ⅰ
佐々木安彦 平成3年(1991):『中屋敷前遺跡』『宮城県文化財調査報告書』第140集合戦原遺跡ほか
宮城県教育委員会
- 吉川 一明 平成3年(1991):『台町古墳群』『宮城県文化財調査報告書』第144集館南園遺跡ほか
宮城県教育委員会
- 千塚山古墳 平成4年(1992):『千塚山古墳測量調査報告書』『村田町文化財調査報告書』第11集
測量調査団 村田町教育委員会
宮城県教育 平成5年(1993):『宮城県遺跡地図』『宮城県文化財調査報告書』第152集
委員会
蔵 王 町 平成6年(1994):『蔵王町史』通史編

写 真 图 版



寺後支群



日当山支群

図版2 各支群の遠景



立石支群



長窪山支群

図版3 各支群の遠景



鹿野山支群

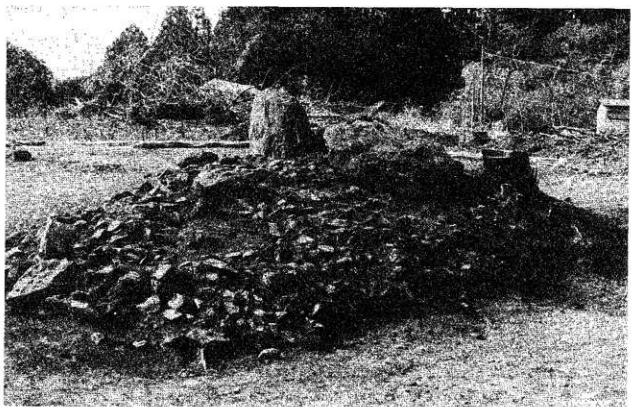


鹿野山支群

図版4 各支群の遠景



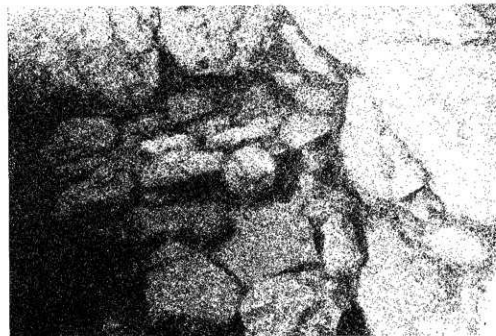
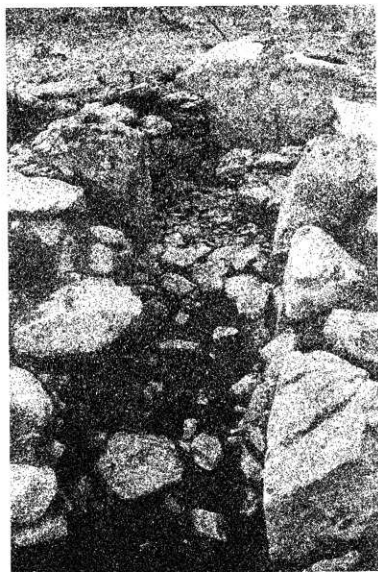
寺後支群A群1号墳(寺後古墳1号墳)



長窪山支群A群1号墳(山の上古墳)

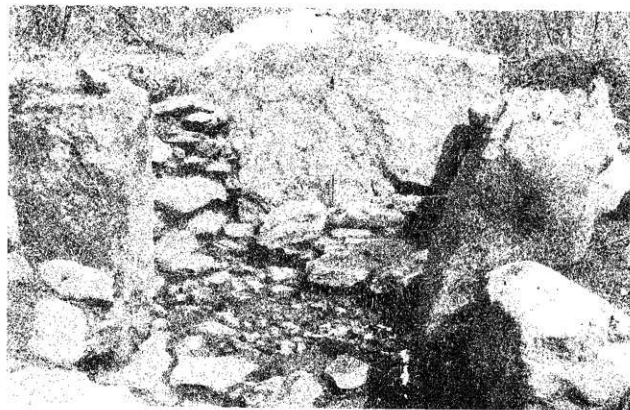
図版5 発掘前の状況

石室全景



玄室内土師器
出土状況

図版6 寺後支群A群1号墳（寺後古墳1号墳）

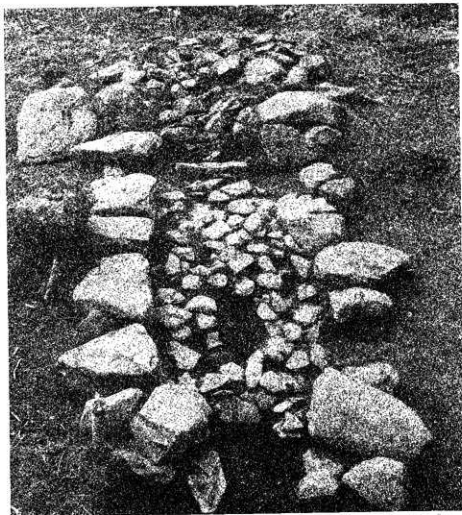


玄門・右壁



左側壁

図版7 寺後支群A群1号墳（寺後古墳1号墳）



寺後支群A群2号墳石室



寺後支群A群3号墳箱式石棺

図版8 寺後支群A群2号墳（寺後古墳2号墳）
同A群3号墳（寺後古墳3号墳）



石室（南側から）



石室（北側から）

図版9 長窪山支群A群1号墳（山の上古墳）

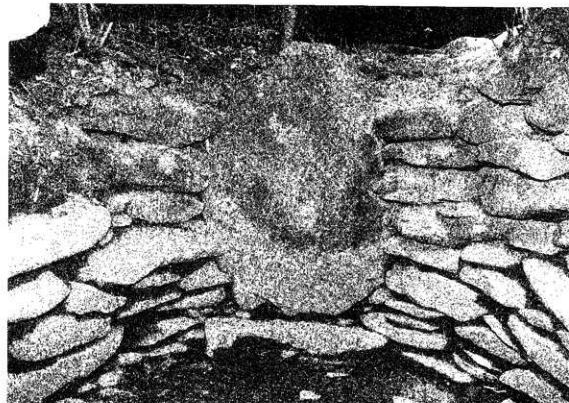


玄門方向から見た扇張り形の石室

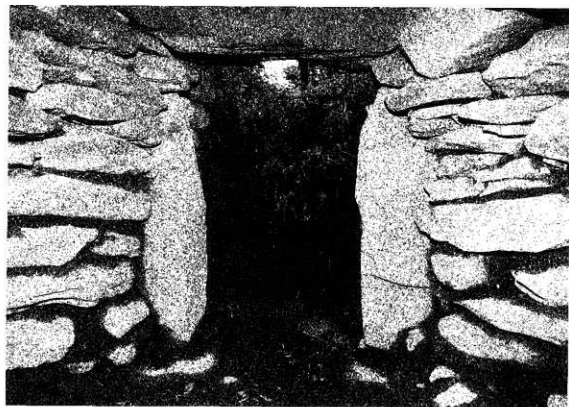


奥壁方向から見た玄門の内側

図版10 長窪山支群E群1号墳



奥壁

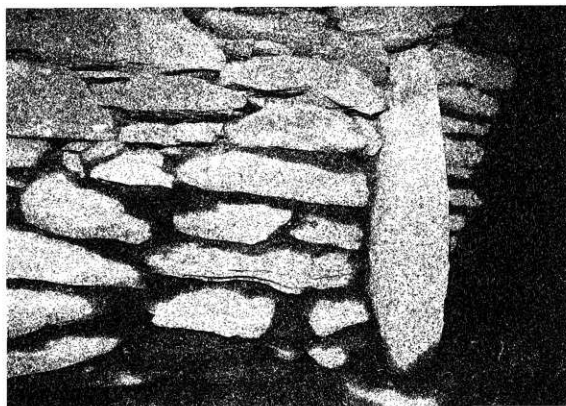


玄門・竊石

図版11 長窪山支群E群1号墳



右側壁



側壁・右玄門柱

図版12 長窪山支群E群1号墳

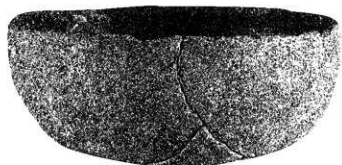


C群1号墳の現況



C群6号墳の現況

図版13 鹿野山支群



土師器碗 (寺後古墳 1号墳)

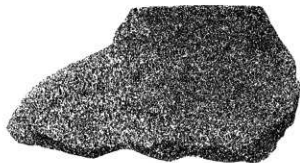


土師器短頸壺 (寺後古墳 1号墳)



刀子 (寺後古墳 1号墳)

鉄 鏃 (寺後古墳 1号墳)



須恵器壺 (寺後古墳 2号墳)



切子玉 (山の上古墳)



直 刀 (山の上古墳)

上野山古墳群分布調査報告書

平成7年7月25日発行

発行 柴田町・村田町・大河原町共同推進事業協議会

宮城県柴田郡大河原町字南129-1

大河原合同庁舎 4 F

TEL. 0224-53-3111 (内線275)

印刷 (株)伊藤印刷